

文學

岩波講座



8

岩 波 講 座

文 學

8

日本文學の問題

編 集

野 中 竹 西 桑 猪 伊

間 野 内 郷 原 野 藤

好 信 武 謙

宏 夫 好 綱 夫 二 整

岩 波 書 店

昭和二十九年六月三十日 第一刷發行

定價二五〇圓

編集者 野間 宏ひろし

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波 雄二郎

印刷者 長野市岡田町一七六番地
田中 重彌



發行所 東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三 株式會社 岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

序

これまで七巻にわたって追求されあきらかにされてきたことは、すべてこの第八巻の主題である日本文學の創造に生きてはたかなければ、その目的をはたすことはできない。この第八巻はこれまでの七巻によって達することのできた到達點をうけとめ、新しい日本の文學をいかにして生みだして行くかをあきらかにしようとした。

あたらしい日本文學の創造について考え、「なにをいかに描くか」をはつきりと示そうとするにあたって、まず、とりあげなければならないのは、植民地になった日本の民族を解放するために必要な民族問題の正しい考え方である。これまで他民族の侵略をやってきた日本にあつては、民族問題の正しい考え方が全體に不足していたが、これは日本の文學にも同じように反映していたといえる。そして、あたらしい文學の創造がすまなかつたのは、この民族問題についての正しい考え方の不足によるところが多かつたのである。

ことばの問題、日本語の問題もやはり同じようにあたらしい國民の文學の創造をはばんできたのであつて、この問題の解決をはかることは現在非常に重要になつてきている。この二つの問題を同時に考えることによって、「なにをいかに描くか」という問題もはじめて考えて行くことができるのである。

しかし、「なにをいかに描くか」という主題の選擇と創作方法については、現在まだあたらしい日本文學の統一した考えと方法がつくりだされていとはいえない。現在あたらしい考えと方法がいろいろの形で出されてきているが、それがいかに統一され、ゆたかなものになつて行くかは、今後の廣汎な國民の文學の創造が前進して行くなかで期待されることである。

このことは、あたらしい詩あたらしい演劇についても、ともにいえることであるが、あたらしい現代詩あたらしい現代演劇については、それぞれの領域の具體的な條件のなかで考えられなければならない。しかし文學創造が正しくすすめられ、それが正しく國民とむすびつけられ、しかも正しい評價を得てさらに次の正しい發展の方向を見出すことができるためには、あたらしい批評が行われなければならない。あたらしい批評の任務の問題がここにある。

文學創造をすすめるにあたってあきらかにされなければならない今日の問題は「文學における理論と實踐」の問題である。文學創造をマンネリズムからすくい、つねにあたらしい方向を發見してすすめるには、この問題の解決が必要である。また文學創造を考えるにあたっての今日の特殊な問題は作家の行動とルボルタージュの問題である。これは今日の時代と社會から求められ、つきつけられている文學の問題である。最後に「文學サークル」の問題は國民の各階層に文學創造の源を求め、さらに創造された作品を深く國民のなかにひろめるためにどうしても考えなければならない問題である。「なにをいかに描くか」の問題もこれらのすべての問題を同時にといて行かなければとくことはできないであらう。

なお、針生一郎氏の「文學の自律性」と除村吉太郎氏の「社會主義リアリズム」とは第七巻にいれる豫定であったが、編集上の都合によってこの巻にいれなければならなくなった。丸山靜氏の「プロレタリア文學の展開」は第六巻にひきつづき、この巻で完結した。また松本新八郎氏の「民族問題と文學」は原稿が間にあわず、ついにいれることができなかった。しかし、必ず何かの方法でお手元にとどくようにしたいと思っている。あわせて深くおわびしたいと思う。

一九五四年六月

第八卷 日本文學の問題 目次

なにをいかに描くか……………野間 宏…三
椎名 麟三…三

日本のことばと文學

I 國民文學とコトバの問題……………大久保 忠利…四

II 「文體論」のためのノート……………寺 田 透…五

批評の任務……………青野 季吉…九

現代詩の精神……………壺井 繁治…二三

現代演劇

I 現代劇の起點……………瓜生 忠夫…二五

II 「現代劇」……………下村 正夫…二三

文學における理論と實踐……………安部 公房…二七

文學とルポルタージュ……………堀田 善衛・三五
文學サークル……………岩上 順一・三五

*

文學の自律性……………針生 一郎・三三
社會主義リアリズム……………除村 吉太郎・三五
プロレタリア文學の展開(つづき)……………丸山 靜・三七

なにをいかに描くか

I 野間 宏 三

II 椎名麟三 三

I

野 間 宏

一

大きな問題がこの日本におしよせている。いやそれは日本とだけいうことはできない。世界全體に、全人類におしよせているのである。一人一人の人間の日々の生活は破れ、そこから世界的な大きな問題が顔をのぞかせている。

いかに山深いところに隠とんしようとも、もはや中世の隠とん者のように、全人類におしよせている大きな問題からのがれるということはできない。例えば人類を絶滅する水素爆弾の問題、或はMSAによる日本再軍備の問題、或はアジアに於けるアメリカの軍事基地の問題を考えてみるならば、このことはただちにわかることである。これらの問題は世界全體の問題であつて、それはただちに私達日本人一人一人にのしかかっている問題であり、それ故に日本民族のすべてを左右する問題なのである。それは日本の一人一人の生活をおしつぶし、その心の奥底、その身體全體をおのかせている。

このような大きな問題を前にして、ひとびとはかつてない心の渇きをもつて、文學に向つてきている。ひとびとの作家に求めるところは大きい。このような問題を前にした人間の生き方を、何等かの形でそこからさぐり取ろうという要求が湧きあがつてきているのである。ひとびとの要求はげしく大きい。それは日本人一人一人の存在が危機におかれて、おかれていることをみなが感じとることが深くなればなるほど、一層はげしく大きくなる。

ひとびとの作家に對する態度はきびしくなる。多くのひとびとは日々やぶれて行く自分の生活、自分の人間内容、

自分のくるしみ、自分の希望をはっきりとてらしだす、新しい光を作品のなかに求めているにもかかわらず、そのような光がなんらそこに創造されていないとすれば、それをすて去るほかにはない。作品をえらぶ眼、せんとくする力を多くのひとは次第に自分のものにしてきている。讀者はたしてその作品が、自分たちと運命をともしてきたひとの手によって創造されたものであるかどうか、を鋭敏にみわけることができる。その作品が自分たちよりは高いところから、教科書のように持つてこられたものであると感じるならば、すぐにも遠ざかってしまう。それは讀者の肌にあわないのだ。かつては日本の多くのひとびとは藝術文學を生活からはなれたものという風に考えていた。これは一種特別な、俗世間をはなれたものであると思ひ込まれていた。そしてひとびとは藝術文學のなかにそれに應じたものを求めようとした。しかしひとびとの文學に對する要求は次第にかわつてきているのである。

ひとびとは決して恐れてはいない。ひとびとはかつて藝術のまわりに金持や藝術主義のひとたちが、たなびかせていた金色のかすみ、をふきちらしてしまった。それは近づきたいもの、特別の才能をそなえていなければ理解することとができないものではなく、自由に見、自由に感じ、そして自由にそこからいろいろのものを引きだしてくることのできるものなのである。いやそれはさらに自分たちの生活と密接につながっていなければならないものであり、自分たちの生活とのつながりを失うならば、それは逆にその生々とした魅力を失い、それ故に金色のかすみをたなびかせて少數の暇人にもてあそばれるはかなくなるものなのである。このことを多くのひとはつきりと知っている。組合の懇談會、あるいは街の讀書會その他の會にでると、いかに一つの作品が多くの生活のなかで讀まれ、その自分の生活のなかの物事と結びつけて考えられるかがわかる。さらに作中の人物の行動や事件は讀者の生活體驗によつて、細部にわたつて討論され、そこに誤りがあるならば、きびしく批判される。そのような讀者はすでに以前の讀者とはちがつて讀者がそれぞれの生活の體驗のなかで具體的にみとどけることのできる現場の意見を、作家もまた正しく受けとらなければならないと考えている。それを正しく受けとり、その意見を參考にすることによつて作家はその作品を

よりよいものに仕上げることであり、さらにその文學創造の發展のみちをひらくことができると考えている。もちろんまだそこにはただちにそれをそのままうけいれることができないようなものもある。またその批判の仕方そのものにも問題がないわけではない。しかし作家と作品にたいする讀者の關心が、以前とは全くかわっているということがそこからとりだせるのである。そこには作家に現實生活の正しい反映を可能にさせることのできるものこそ讀者であり、讀者こそは作品の内容を生々とした生活でみたすことのできるものであるという確信が次第に生れてきているのである。實際にもし、作家が自分の作品にたいして、國鐵の機關區の人から、稻作をしている農民から、また新聞配達をしているアルバイト學生から、また駐留軍の下ではたらく勞働者たちから、正確な意見を求めることができるならば、自分の作品について正しい判斷をもつのに非常に役立つのである。さらにそれら各階層のひとたちから、その未知の生活の姿をきくことができ、その互のつながりがどのようになっているか、そしてその生活のなかでひとびとはどう考え、どう生きようとしているのかを、なんのかくすところもなく受取ることができるならば、それはさらにもっと役立つのである。そこには生活がある。作家が何よりも求めている生活であるからである。

二

作家は何よりも生活を求めている。生活、それも新しい生活、かつてどの作家もとりあげることのなかった新しい生活を求めている。或るものは旅行によってそれにふれる。或るものは直接に自分の實生活からそれを得る。文學が人間生活を言葉によって再表現するところに成立つことを考えれば、作家が何よりも先ず生活を求め、それをさがして歩くということは當然のことなのである。ロチやキップリングやモームなどは、旅行によってその新しい生活にふれようとした。バルザックやゾラやディッケンズやその他の大きな前世紀の作家たちによって、人間の私生活から社

會生活にわたるほとんどの生活が描きつくされたと考えられたからである。しかし新しい生活はただ異國趣味によって東洋や南洋諸島をめぐるなかで見出されるというようなものではない。それらの島々で見出された生活よりも、はるかに不可思議でなぞにみちた生活がこの世界には生々と展開されており、むしろそこにこそ人間生活の中心があるということが、勞働者出身のゴリーキーやさらにまたジャック・ロンドンなどによって明かにされてから、生活がどこにあるかということは誰の眼にもはっきりとうつるようになったのである。バルザックはその巨大な『人間喜劇』の登場人物を區役所の戸籍簿と競争させようとまで考えていたといわれるが、バルザックの登場人物には、なお多くの人間が缺けていた。そしてそれは道ばたの石ころのようにとりあつかわれ、おしつぶされながら一日中働いているひとたちであり、バルザックの多くの登場人物たちの食べる食物や、その着る衣類、その住む住居をつくるために勞働しなければならぬ人間であった。そしてこれらの民衆のなかにこそ眞實の生活があるということは、現在ほとんどすべての作家のみとめるところである。

日本に於てもこのことはかわりが無い。プロレタリア文學は作家が向わなければならない生活がどこにあるかということを明かにした。もちろんそれ以前に於ても自然主義文學はこの問題を取上げなかったわけではない。さらにまた自由民權運動の思想と結びついた文學者たちもはっきりと眼をそこに向けていたということができる。この問題を考えることのなかった文學者はほとんど數えることができないだろう。『小説神髓』を書いて明治時代もつともはやく小説の向うべきところを考えた坪内逍遙、また『小説總論』を書きリアリズム小説の創造に全力を傾けた二葉亭四迷もやはりこの問題を考えないわけにはいかなかった。彼等は作家の眼の向けられるべきところを考え、それと同時にそこに見出す日本社會の平民の生活を取りあげて、いかにそれを描きだすかということを同時に考えたのである。しかし作家の向うべき對象についてさらに精密に考えさらに具體的に作家にその向うべき場所を示すことができたのは、プロレタリア文學の運動であった。

『小説神髓』によれば「小説の主眼は人情なり、世態風俗これに次ぐ。」といわれる。また「詩歌は必ずしも模擬を主眼となさざれども、小説は常に模擬を以て其全體の根據となし、人情を模擬し世態を模擬し、ひたすら模擬するものものをば眞に逼らしめむと力むるものなり。」ともいわれる。人情世態こそ作家の向うべきところである。『小説神髓』は人情世態のうちとくに人情を重視し、人間の内面世界をその社會的環境からきりはなして考える傾向があるのであるが、しかし外的環境とその内面世界の關係についてはあくまでも精密につきとめて、人情世態の眞にせまうとしてゐるのである。二葉亭四迷もその『小説總論』のなかで同じことをとりあげて言っている。「小説に勸懲、描寫の二あれど云々の故に、摸寫こそ小説の眞面目なれ、さるを今の作者の無智文盲とて、古人の出放題に誤られ、痔疾の療治をするやうに矢鱈無性に勸懲々々といふは何事ぞと、近頃二三の學者先生切齒をしてもどかしがられたるは、御尤千萬とおぼゆ。主人の美術定義を擴充して之を小説に及ぼせばとて、同じ事り。抑々小説は浮世に形はれし種々雑多の現象（形）の中にて其自然の情態（意）を直接に感得するものなれば、其感得を人に傳へんにも直接ならでは叶はず。直接ならんとは、摸寫ならでは叶はず。されば摸寫は小説の眞面目なること明白なり。」このように小説は浮世にあらわれた種々雑多の現象を取りあつかひ、それを言葉をもって再現するところに、その眞面目があるという風に考えられている。田山花袋もまた作家の向うべきところがあるかを考え次のように言っている。「凡そ小説家は何でも知らなければならぬ。世相のすべての状態、人間の個々の性情、人間の生活の千差萬別、下は乞食の生活から、上は貴族の生活まで一々見て、觀察してその深いところまで入つて行かなければならぬ。紅葉山人が嘗て『小説は何うしても耳學問が必要だ。深くは知らないでも、廣くは知らなければいけない』と言つたが、實際さうだ。廣い上に深く知り得れば一層好いのだ。小説家には何でも知らなくて好いと言ふものはない。山の生活、海の生活、田舎の生活、都會の生活、すべて必要でないものはない。又それを縦から言つて見て、人間の年齢のあらゆる階級、幼年、少年、青年、中年、老年、すべてそれを知らなければならぬ。であるから、ぐづぐづして引込んでゐて

は駄目だ。何にでも行つて打突かつて見る必要がある。それからまた何でも彼でも新しい知識をつめ込む必要がある。法律も知らなければならぬ。政治も知らなければならぬ。軍人の學問も片端位は嚙らなければならぬ。國家の外交のかけ引きなども知らなければならぬ。さうかと思ふと、花柳界の女達も知らなければならぬ。私娼窟の女も知らなければならぬといふ風である。實に忙しい。實際の方でもさうだが、讀書から得る知識の方も矢張さうだ。いくら實際々々と言つて、その方面から各種の雑多な生活と知識を得ようとしても、さうさうは得られない。さう一々經驗もされない。仕方がないので、さういふ點は讀書で補ふ。書はすべてこの世の中にある本は悉く實際生活の狀態の經驗の『あらはれ』であるといふことを私達は考へなければならぬ。昔から今日に至るまで、あらゆる本は、何んな零碎な本でも、冊子でも、すべて人間生活の狀態の『あらはれ』である。従つて、そこからも多くの知識が得られる。自分の經驗したのではないが——他人の經驗したのではあるが兎に角本には生活に於けるある經驗の書かれてあることは確かである。であるから、小説志願者はあらゆる書籍を涉獵することが肝心である。』(『小説作法』)

人間生活の狀態こそが小説の源であり、すべてがそこから取りだされなければならないという考えがここにある。これらの小説論は、小説は人間とははるかかけはなれた神々や大名や王侯の生活を追求するのではなく、人間以下のつくりものの人物の生活を追求するのでもない、まさに人間の生活を追求するものであることを明かにしているのである。それはルネッサンス期に人間を身分によつて差別する封建貴族、僧侶の支配を打倒する武器として、人間の眞の行爲、徳、生活は人間の現世の生活をいやしめ抑壓する貴族や僧侶のなかにはなくして、生活を壓迫者の手から解放し現世の生活をたのしもうとする平民のなかにあることを明かにするためにイタリアに生みだされた小説の起源を考えれば當然のことである。これらの小説論はヨーロッパの小説の起源にまでさかのぼることはしていないが、ヨーロッパの小説と小説論に深く影響されて日本に新しい小説についての考えをみちびき入れ、それによつてさらに日本の新時代にふさわしい日本獨自の小説を生みだそうとして考えつくされたものである。

バルザックも人間の風俗の歴史を編もうと考え、人間社會の全領域にわたって、その生活風景をあやまりなく描きだそうとしたことができる。その『人間喜劇』は三部に分れており、第一部は人間生活の、種々相を分類し整理し互に關係づけ、位置づけようとする風俗研究、第二部はその種々相の決定要素をさぐる哲學研究、第三部はその原理をひきだそうとする分析的研究であるとされているが、『人間喜劇』の主要部分をしめている風俗研究は、私生活情景、地方生活情景、パリ生活情景、政治生活情景、軍隊生活情景、田園生活情景にわけられているのである。

またゾラがその『ルーゴン・マッカル叢書』を創造しようとしたとき、彼はバルザックにならって、バルザックがその時代にした仕事を第二帝政時代に實現しようと考え、バルザックが描いた多くの階級、階層の人たち、中産階級、勞働者、商人、聖職者、淫賣婦、藝術家等の生活を描きだそうとした。さらにゾラの關心はバルザックよりもあるかに深く民衆の生活に向っている。彼はバルザックの描いた上流社會の生活を描くことには、その出身の關係もあって餘り成功しなかった。しかし彼は中流社會、下層社會の生活を描いて新しい領域をきりひらくことができたのである。

三

これらの作家たちは同じように人間の生活に何よりも眼をそそぎ、そのあらゆる生活に通じてその眞實にせまろうとしたということができるのである。しかしはたしてこれらの作家はそのめざすとおりの人間の生活を知りつくしてその眞實を描くことができたのだろうかという、いまバルザックやゾラを別にして考えるならば、この疑問を否定する答は得ることはできない。坪内逍遙、二葉亭四迷はもちろんのこと、『小説神髓』や『小説總論』の考えにみちびかれた作家たち、また島崎藤村や田山花袋など自然主義の作家たちも、そのめざすところを小説として實現することは

きなかったと言えると思う。その原因についてはすでに多くの評論家が明かにしているように、作家の民衆からの孤立にあると考えられる。これらの作家たちがその心のなかに人間生活のあらゆる姿を自分のものにしようという考えをもっていたことは明かである。しかし彼等の明かにすることのできたのは、限られた狭い生活の姿であり、廣汎な國民の各階層の生活のなかをふみわけ、その生活のなりたちをさぐり、その關係をとりだし、その上にたつてその未來を描きだすということはできなかった。なぜといって作家たちもまた天皇制權力によって身分別に、地域別に階層別に分裂させられ、壓迫されつづけた國民と同じように一つの狭いところにとじこめられ、人間生活を明かにすることのできる展望をもつことができなかったのである。國民の生活はいよいよ權力によっておしつぶされ、狭いところに閉鎖されていたが、作家たちもまた同じ權力によってその眼をふさがれようとした。そしてもし作家がその閉鎖された國民の生活をこじあけ、その生活のほんとうの姿をとらえ、それを多くのひとびとにしめそうとするならば、たちまち國家の權力によって注意をうけ、おびやかされなければならなかったのである。日本の作家たちはこのようなところに生きながら、しかもなお人間生活の眞實をつきとめようとした。そして人間生活の眞實をとりだすことができる文學の立場を確立しようとした。

『1』 そのような文學の立場はどこにあるかといえば、それは閉鎖されようとする人間生活を、閉鎖をつきやぶつてついに互につながり合つて廣々とした自由な生活をひろげようとする民衆の立場をさがし、そこにたつて自分の文學を創造するところに生れるのである。人間生活の眞實をとらえ、人間生活の正しい批判を行おうとする近代小説の誕生したのもまた同じところであった。それは不合理な封建的な力によって壓迫され統制されようとする多くのひとたちの人間生活を生々とのぼし、どこに人間生活の眞實があるかをとらえようとするところにあつたのである。民衆のなか深くはいり、民衆の立場にたつて文學を創造するという文學の立場の確立によって小説ははじめて成立つことができたということを考えてみれば、このことはさらにはつきりする。